

改訂レッドリスト
付属説明資料

哺乳類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「哺乳類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のweb ページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

掲載種と解説内容

平成19年8月3日に公表された哺乳類改訂レッドリストに掲載された92種・亜種のなかから、同リストにおいて新規掲載あるいはランク変更された43種・亜種について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

○カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]等の表記）

○目名、科名

○和名

○学名、記載者名、記載年

○生息状況等、以下の項目を簡潔に記載

日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／
生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原因とその種の危機の状況／保護対策

（存続を脅かしている原因は、できる限り記述の統一を図るために、原則として別表に挙げたタイプ区分を用いコードを付記した。）

○参考文献

■原因のタイプ区分表

森林伐採 11	湖沼開発 12	河川開発 13
海岸開発 14	湿地開発 15	草地開発 16
石灰採掘 17	ゴルフ場 21	スキー場 22
土地造成 23	道路工事 24	ダム建設 25

水質汚濁 31	農薬汚染 32	
園芸採取・観賞用捕獲・狩猟 41	薬用採取 42	
その他不法採集など 43	踏みつけ 51	
捕食者侵入 52	管理放棄 53	
遷移進行・植生変化 54	火山噴火 55	
帰化競合 56	異種交雑・放流 57	
産地局限 61	近交化進行 62	その他 71
不明 99		

執筆

執筆はつぎの方々にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

阿部 永（元北海道大学農学部）

石井信夫（東京女子大学文理学部）

押田龍夫（帯広畜産大学畜産生命科学研究部門）

粕谷俊雄（元帝京科学大学生命環境学部）

金子之史（香川大学名誉教授）

中川 元（斜里町立知床博物館）

前田喜四雄（奈良教育大学教育学部）

村上隆広（斜里町立知床博物館）

今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

食肉目 イタチ科

CR (絶滅危惧 IA 類) [←DD]

ラッコ *Enhydra lutris* (Linnaeus, 1758)

薄茶色から褐色、黒色に近いものまで毛色に変異がある。頭胴長 110cm、尾長 30cm、体重 34kg 程度。北アメリカ西海岸のカリフォルニアからアラスカ沿岸、アリューシャン列島、千島列島、北海道東部沿岸に分布する。90 年代半ば以降、道東沿岸の目撃例が増加したが漁網への羅網死も多い。襟裳岬では 2002 年以降現在まで 1~2 頭が定着しており、納沙布岬、落石岬を含めて同時に 15 頭が観察されたことがある。北方四島からの分散個体が来遊し再定着の過程にあると考えられるが、羅網などの阻害要因により安定して存続できる状況にはない。

【参考文献】 5)、15)、21)

執筆者：中川 元 (斜里町立知床博物館)

食肉目 ネコ科

CR (絶滅危惧 IA 類) [←EN]

イリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* (Imaizumi, 1967)

ユーラシア東部から南アジアに分布するベンガルヤマネコの西表島 (289km²、沖縄県) 固有亜種。島の中央部よりも海岸部のほうが生息密度は高い。個体群が小規模 (1994 年に 99~110 頭と推定) である上に、近年、定住個体数 (とくに雌)、目撃件数などの減少傾向が認められることから CR と評価した。減少原因としては、海岸部における土地利用改変、道路建設 (24)、交通事故 (2001~2006 年に 13 件) などが考えられている。国の特別天然記念物、国内希少野生動物種に指定されている。

【参考文献】 17)、38)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

海牛目 ジュゴン科

CR (絶滅危惧 IA 類) [新規掲載]

ジュゴン *Dugong dugon* (Müller, 1776)

東西はアフリカ東岸からバヌアツまで、南北は緯度 27 度間に分布する浅海性草食哺乳類。性成熟 10 年前後、寿命 70 年、最大体長 3m。オーストラリアを除き、各地で個体数減少が顕著。日本は本種の北限にあたり、かつては奄美諸島から八重山諸島まで普通にいたが、今では沖縄島の中・北部に孤立している。航空機調査での発見は数頭で、5 分間に及ぶ潜水による見落とし分を含めても、生息数は 50 頭以下であろう。天然記念物に指定され (琉球政府 1955 年、国 1972 年)、水産資源保護法 (1993 年) でも捕獲を禁止。生息環境の改善が急務。

【参考文献】 18)、27)、35)、37)、40)、43)

執筆者：粕谷俊雄 (元帝京科学大学)

食虫目 モグラ科

EN (絶滅危惧 IB 類) [←VU]

エチゴモグラ *Mogera etigo* Yoshiyuki & Imaizumi, 1991

日本固有種。日本最大のモグラで、頭胴長 153~182mm。染色体の分化が著しいことから分類が変更 (亜種から種) された。越後平野のうち、深い沖積軟土層をもつ約 870km² の農耕地域に限産するが、農業基盤整備事業 (23)、除草剤の多用 (32) 等により生息不適地が拡大し、分布が後退している。また、そのような環境にも生息できる小型対抗種アズマモグラが、分布周辺の空白地に進出して占拠域を拡大しつつあり、本種の分布は急速に縮小している。生息地が農業用高度利用地であるとともに有力な競争種がいるため、現在のところ有効な保護策はない。

【参考文献】 2)、5)

執筆者：阿部 永 (元北海道大学農学部)

翼手目 キクガシラコウモリ科

EN (絶滅危惧 IB 類) [←VU]

オリコキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus orii* Kuroda, 1924

奄美諸島固有亜種。鼻部が馬蹄形に見えるキクガシラコウモリ科に属し、その中の小型種である。前腕長は36～44mm、頭胴長は35～50mm。昼間の隠れ家は鍾乳洞、海蝕洞や各種の人工洞である。本亜種の分布する島々の合計面積が1,093km²であり、これには市街地、住宅地、その周辺の農地も含まれており、実際の出現範囲はこれより少ない。さらに、本亜種の利用する洞窟の近年におけるさらなる内部環境の悪化や消失により、利用しなくなった洞窟が見られるようになり、個体数の減少が著しい。

【参考文献】 8)、50)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 キクガシラコウモリ科

EN (絶滅危惧 IB 類) [←VU]

イリオモテコキクガシラコウモリ *Rhinolophus perditus imaizumii* Hill & Yoshiyuki, 1980

沖縄県西表島固有亜種。鼻部が馬蹄形に見えるキクガシラコウモリ科に属し、その中の小型種である。前腕長は40～44mm、頭胴長は41～50mm。西表島に広く分布する。昼間の隠れ家は鍾乳洞、海蝕洞や各種の人工洞である。西表島の面積は289km²であり、これには採餌にあまり利用されない住宅地やその周辺の農地も含まれており、実際の出現範囲はこれより少ない。さらに、本亜種の利用する洞窟の近年におけるさらなる内部環境の悪化や消失により、利用しなくなった洞窟が見られるようになり、個体数の減少が著しい。

【参考文献】 26)、49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

EN (絶滅危惧 IB 類) [←VU]

ウスリホオヒゲコウモリ *Myotis gracilis* Ognev, 1927

サハリン、シベリア東部、中国東北部、朝鮮半島、北海道に分布する。足の小さいホオヒゲコウモリ類であり、前腕長が34～37mm、頭胴長が38～50mmである。北海道内では強度に分断されている13町村の26地域から記録され、分布地は自然林、ないしはそれに近い森林のみであり、しかも極端に分布域が狭く、かなり局地的であることが判明した。このようなことから、生息地面積は多く見積もっても、500km²には達しないであろう。自然林やこれに近い森林の減少(11)が、本種の絶滅の脅威になっている。

【参考文献】 19)、49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 オヒキコウモリ科

EN (絶滅危惧 IB 類) [←DD]

オヒキコウモリ *Tadarida insignis* (Blyth, 1861)

中国、朝鮮半島、日本に分布する。腿間膜から長く突出した尾と大きな耳介が特徴である。長距離を高速で持続的に飛ぶ能力がある。日本における確認地点は北海道から九州に至る。これまでの20に満たない記録確認はすべて偶然のようであり、かつては日本には大陸などから迷って不時着したと思われていた。近年、国内でも離れ島や家屋で繁殖していることが確認されたが、その数は5未満である。ちなみに、繁殖が確認された1つの家屋は、改築のため利用されなくなった。

【参考文献】 10)、11)、41)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

ネズミ目 ネズミ科

EN (絶滅危惧IB類) [←EN]

アマミトゲネズミ *Tbkudaia osimensis* (Abe, 1933)

日本固有種。オキナワトゲネズミ *T. muenninki* やトクノシマトゲネズミ *T. tokunoshimensis* に比し外部形態と頭骨でやや小型。奄美大島にのみ分布。島南西部に集中するが、北東部にも孤立個体群がある。スダジイなどの広葉樹の老壮齢林で広い面積が比較的連続している森林に生息。根株の空洞部や倒木下などで捕獲。生存を脅かしている原因には森林破壊(11)と捕食者の侵入(52)があり、ジャワマングースやノイヌ、ノネコの捕食が挙げられる。トクノシマトゲネズミの新種記載(2006年)によって、本種は奄美大島個体群のみとなった。トゲネズミとして国の天然記念物に指定されている。

【参考文献】 13)、14)、45)

執筆者：金子之史(香川大学名誉教授)

ネズミ目 ネズミ科

EN (絶滅危惧IB類) [←EN]

トクノシマトゲネズミ *Tbkudaia tokunoshimensis* Endo & Tsuchiya, 2006

日本固有種。アマミトゲネズミ *T. osimensis* に比し外部形態および頭骨で大型。徳之島にのみ分布。北部の天城岳と中部の井之川岳周辺のスダジイなどの広葉樹の老壮齢林で広い面積が比較的連続した森林に生息。生存を脅かしている原因には森林破壊(11)が考えられる。徳之島での最初の記録が1975年であり、以降はアマミトゲネズミと分類されていたが、外部形態や頭骨、染色体数、mtDNA、rDNAなどが異なることによって2006年に新種とされ、今回のレッドリストに掲載された。トゲネズミとして国の天然記念物に指定されている。

【参考文献】 7)、13)、45)

執筆者：金子之史(香川大学名誉教授)

食虫目 トガリネズミ科

VU (絶滅危惧II類) [←NT]

コジネズミ *Crocidura shantungensis* Miller, 1901

小型のジネズミで頭胴長55.0~72.0mm。尾の長毛は尾端を除くほぼ全体に分布。ロシア極東域、朝鮮、中国東部、台湾、対馬等に分布。対馬(696km²)では農耕・村落域、二次林などに生息し、有効生息域は300km²ほどであろうと考えられる。この地域は市街化、人工化の影響を最も受けやすいところであるため、分布域の縮小、個体群の縮小が予想される。また、生息密度はワタセジネズミ等に比して著しく低い。

【参考文献】 4)、28)

執筆者：阿部 永(元北海道大学農学部)

翼手目 ヒナコウモリ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

シナホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi hosonoi* Imizumi, 1954

日本固有亜種。足の小さいホオヒゲコウモリ類であり、前腕長が33~36mm、頭胴長が42~51mmである。昼間の隠れ家は樹洞と思われるが、家屋での繁殖例も知られる。長野県、静岡県、岐阜県、石川県、奈良県などで確認されているが、その確認地点は7県23地点とあまり多くなく、かつそれらは互いに分断されている。かつてはその出現範囲が1,500km²であり、かつ「生息地が過度に分断されているか、5カ所以下」とされていたが、その後の調査で、23地点から記録され、出現範囲が5,000km²以上はあると推測され、VUと評価された。

【参考文献】 42)、49)

執筆者：前田喜四雄(奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

ホンドノレンコウモリ *Myotis nattereri bombinus* Thomas, 1905

朝鮮半島、シベリア東部、日本列島にかけて分布する。日本では北海道、本州、四国、九州に分布する。主に洞窟から確認されるが、洞窟がない地域からも確認されている。腿間膜の後縁にそって細毛が列生するホオヒゲコウモリの仲間である。前腕長は38~42mm、頭胴長は47~55mmである。かつては生息確認地が非常に少なかったが、最近では22道府県の62地点から記録がある。この生息確認地点の分布から、繁殖集団数を49と推定し、一集団あたりの雌数(50~60個体)から、種全体の雌成熟個体数を2,450~2,940と推定し、VUと評価した。

【参考文献】 9)、49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

VU (絶滅危惧II類) [←EN]

コヤマコウモリ *Nyctalus furvus* Imaizumi & Yoshiyuki, 1968

中国、台湾、日本に分布する。小型のヤマコウモリであり、前腕長が48~53mm、頭胴長が76~84mmである。日本では青森県、岩手県、福島県からのみ確認されていたが、その後の調査からこれまでに秋田、群馬県を含め5県の14地点、岩手県のみでも10地点から確認された。これらから確認地点が不明瞭な秋田県と群馬県を除外して、岩手県・青森県個体群と福島県個体群の2つの出現範囲を算出すると合計で5,031km²となり、かつてより出現範囲が広がったことからVUと評価した。

【参考文献】 24)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

NT (準絶滅危惧) [←VU]

フジホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi fujiensis* Imaizumi, 1954

日本固有亜種。足の小さいホオヒゲコウモリ類であり、前腕長が33~36mm、頭胴長が43~51mmである。富士山より北部の本州から知られ、かつては富士山、岩手県の3か所のみから確認されていた。しかし、その後の調査で、10県39地点から生息が確認され、分布域が相当広いということが判明した。そこで、調査が進めば、さらに確認地点が増えることが予想される。いずれにしても、自然林に生息するので、これらの環境が減少すれば、本亜種の生息が脅かされる危険性がある。

【参考文献】 42)、49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

NT (準絶滅危惧) [←VU]

ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* Thomas, 1911

中国、朝鮮半島、日本列島に分布する。狭長型の翼をもつ大型コウモリであり、前腕長は57~66mm、頭胴長は89~113mmである。樹洞を昼間の隠れ家にする。長距離を高速で飛翔するが、逆に小回りがきく飛翔が不得意であるため、樹木が密生する森林には生息しない。このような条件を満たし、かつ樹洞を多くもつ大木が多いのは社寺林であるが、このような場所では、倒木に因る事故防止のため樹洞をもつ大木が伐採され、本種の隠れ家が消失しつつある。かつての記録は17県からであったが、最近では33県128地点から見つかった。

【参考文献】 23)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

食肉目 イタチ科

NT (準絶滅危惧) [←VU]

ツシマテン *Martes melampus tsuensis* Thomas, 1897

日本固有種テンの対馬 (696km²、長崎県) 固有亜種。針葉樹植林や河川改修などによる好適生息環境の減少の影響が懸念されているが、対馬全域に分布し、生息痕跡数、目撃数も多く、分布域の縮小傾向や個体数の減少傾向は知られていない。現在のところ絶滅の危険が増大しているとは考えにくいことからNTと評価した。国の天然記念物に指定されている。

【参考文献】 39)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

食肉目 イタチ科

NT (準絶滅危惧) [←DD]

エゾクロテン *Martes zibellina brachyura* Temminck, 1844

日本固有亜種。頭胴長 350~470mm、尾長 110~160mm。ロシア、ヨーロッパ東部、中国、北海道に分布。ネズミをはじめとする小動物、昆虫、果実などを食物とし、主に森林性で樹上も頻繁に利用する。毛皮をとるために乱獲されたことで激減したため、1920年頃から禁猟となった。その後生息状況が不明のためにDDとされていたが、近年の研究によって、南西部を除く北海道に広く分布していることが明らかとなった。しかし、本州から人為的に導入された近縁種テン (*M. melampus*) との競合や交雑が懸念 (56) されるため、NTと評価した。

【参考文献】 29)

執筆者：村上隆広 (斜里町立知床博物館)

食肉目 イタチ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

チョウセンイタチ *Mustela sibirica coreana* Domaniewski, 1926

ヨーロッパ東部から東アジアに広く分布するタイリクイタチのうち、朝鮮半島と長崎県対馬 (696km²) に分布するものが本亜種とされ、日本における本種の唯一の在来個体群である。上島、下島ともに分布するが、水辺環境に依存するので好適生息地はもともと狭く、河川改修 (13) などの影響を受けやすいと考えられる。生息痕跡数は、本亜種の好適生息環境で行われた調査ではないものの、ツシマテン (NT) やツシマヤマネコ (CR) よりも少なく、個体数が減少している可能性があり、NTと評価した。なお、西日本 (九州、四国、中国~中部地方) の個体群は移入であり評価の対象外とした。

【参考文献】 39)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

ウサギ目 ウサギ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

サドノウサギ *Lepus brachyurus lyoni* Kishida, 1937

日本固有種ノウサギの佐渡島 (855km²、新潟県) 固有亜種。トウホクノウサギと同じく冬毛は白色であるが、背面の毛は中間にオレンジ色の帯があることがトウホクノウサギと異なるとされる。本亜種による造林木食害の対策として1959年から63年までの間にホンドテン 21頭が佐渡に放獣され、その増加に伴って本亜種の減少が見られ、とくに大佐渡 (島の北部) でこの傾向が著しいことが指摘されているためNTと評価した。

【参考文献】 30)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

食虫目 トガリネズミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

シコクトガリネズミ *Sorex shinto shikokensis* Abe, 1967

日本固有種。四国産の大型亜種で頭胴長 64.0~76.0mm。徳島県剣山から愛媛県石鎚山にまたがる四国中央山系の高標高域、およそ 150~200km² が分布域と考えられ、生息環境は比較的安定している。しかし、地球温暖化が進行すれば分布域のさらなる縮小化が予想される。また、現在でも生息域はいくつかに分断されている可能性が高いが、この点については情報不足で不明。有力な競争種はいない。

【参考文献】 1)、6)

執筆者：阿部 永 (元北海道大学農学部)

翼手目 ヒナコウモリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ヒメヒナコウモリ *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758

ヒナコウモリよりも小型であり、前腕長は 42~46.5mm である。イギリスからシベリアにかけて分布が知られており、日本からは記録がなかったが、2002 年に初めて北海道礼文島で記録された。しかし、この個体はシベリアからの迷入個体と思われており、まだ詳細は不明である。

【参考文献】 36)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

齧歯目 リス科

DD (情報不足) [新規掲載]

エゾシマリス *Tamias sibiricus lineatus* (Siebold, 1824)

本亜種は、北海道、サハリン、択捉、国後、利尻、礼文、天売、焼尻に分布する。頭胴長 124~165 mm。北海道内における本格的な分布調査は為されておらず、近年の分布状況は不明である。札幌市の公園などでは、定着を目的として、かつて別亜種である大陸産シマリスが積極的に放獣されたが、その個体数、場所、期間については把握されていない。大陸産個体の大規模な放獣は在来エゾシマリスに大きな影響を与えたと考えられるが、両者の交雑・競合などの状況もまったく不明である。

【参考文献】 5)、20)

執筆者：押田龍夫 (帯広畜産大学)

食虫目 トガリネズミ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

九州地方のカワネズミ *Chimarrocale platycephala* (Temminck, 1842)

日本固有種。九州産は本州産に比べ小型で、頭胴長 102.3~131mm。最近の調査では、本州では青森県から山口県にわたる 153 ヶ所の調査地中 80 ヶ所 (52%) で生息が確認された一方、九州では 24 ヶ所中わずか 6 ヶ所 (25%) で生息が確認されたにすぎない。すなわち、九州での生息地率は本州の半分以下である。また、1950 年代に捕獲記録のある英彦山地区では最近の 3 ヶ所での調査を含め、その後まったく生息情報がない。これらのことから九州個体群は衰退傾向が顕著で、分布の分断化が進んでいると考えられる。

【参考文献】 3)

執筆者：阿部 永 (元北海道大学農学部)

翼手目 ヒナコウモリ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←VU]

本州のチチブコウモリ *Barbastella leucomelas darjelingensis* (Hodgson, 1855)

インドから中国西部、日本に分布する。左右の耳介が頭頂部で接触するコウモリであり、前腕長は 39~44mm、頭胴長は 50~63mm である。本来は樹洞を昼間の隠れ家にすると思われるが、洞窟などでも見つかっている。北海道、本州、四国に分布するが、北海道では 59 地点と広範囲から多くが記録されているものの、本州では 7 県の 18 地点から記録があるのみであり、その記録個体数も多くなく、分布が強度に分断されている。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

翼手目 ヒナコウモリ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←VU]

四国のチチブコウモリ *Barbastella leucomelas darjelingensis* (Hodgson, 1855)

インドから中国西部、日本に分布する。左右の耳介が頭頂部で接触するコウモリであり、前腕長は 39~44mm、頭胴長は 50~63mm である。本来は樹洞を昼間の隠れ家にすると思われるが、洞窟などでも見つかっている。北海道、本州、四国から知られるが、北海道では広範囲から 59 地点と多くが記録されているものの、四国では 1 地点から記録されているのみである。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄 (奈良教育大学)

霊長目 オナガザル科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←LP]

北奥羽・北上山系のホンドザル *Macaca fuscata fuscata* (Gray, 1870)

ホンドザルは日本固有種ニホンザルの本州・四国・九州固有亜種。従来「東北地方のホンドザル」としてレッドリストに掲載されていた多くの個体群 (津軽半島、白神山地、阿武隈山地北部など) は分布域拡大・個体数増加の傾向にあるが、北上山地の五葉山 (1997 年に 40~100 頭と推定) に孤立する個体群は小規模であり、ほかにも奥入瀬 (青森)、八幡平 (秋田・岩手)、栗駒山 (秋田・岩手・宮城) など奥羽山脈北部に現況の不明な群れ分布情報があることから、当該地域に限定して LP と評価した。

【参考文献】 33)、44)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

霊長目 オナガザル科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←LP]

金華山のホンドザル *Macaca fuscata fuscata* (Gray, 1870)

従来「東北地方のホンドザル」の一部に含まれていたもののうち、金華山島 (約 10km²、宮城県) に見られる個体群は、ほかの個体群から隔離され、小規模 (約 250 頭) である。また、1983・84 年の厳冬には個体数が 270 頭から 180 頭に減少するなど、大きな変動が見られる場合があることから LP と評価した。

【参考文献】 16)、33)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

食肉目 クマ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

天塩・増毛地方のエゾヒグマ *Ursus arctos yesoensis*, Lydekker, 1897

天塩山地と増毛山地に分布し、石狩川と天塩川に沿う低地によって他地域から分断された小規模で孤立性が比較的高い個体群である。生息数は、狩猟者によって200頭未満と推定されている。さらに、1997年度に行われた調査で生息が確認された5kmメッシュ数は90(面積500km²未満)で、1978年調査時の39%に減少していることからLPと評価した。減少をもたらしている要因は不明である。

【参考文献】 12)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

食肉目 イタチ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←NT]

本州のニホンイイズナ *Mustela nivalis namiyei* Kuroda, 1921

ユーラシア・北アメリカの北部に広く分布するイイズナのうち、青森県産個体で記載された本亜種の分布域は、北海道などを含むとされることがあり不明確である。従来は、本亜種が本州個体群のみを指すものとして掲載されていたが、より広く分布する亜種の地域個体群として再評価した。ただし、本個体群は、北海道産のものと同染色体数や核型、頭骨形態などに違いが認められている。青森県、秋田県、岩手県の一部地域に分布するが、個体数はきわめて少ないと考えられ、生息地である山麓や低地の開発の影響が懸念されている。

【参考文献】 31)、32)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

偶蹄目 カモシカ科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [新規掲載]

九州地方のカモシカ *Capricornis crispus* (Temminck, 1845)

カモシカは本州、四国、九州に分布する日本固有種。九州個体群については、1994・95年度と2002・03年度に行われた調査を比較すると、分布域の拡大(生息確認メッシュ数が414から759)が見られる一方、生息密度は大きく低下(2.66から0.61頭/km²)し、推定個体数も全体で1,500~2,000頭から約500頭と減少傾向が認められたことからLPと評価した。減少要因としては、増加しているニホンジカとの競合が疑われている。国の特別天然記念物に指定されている。

【参考文献】 34)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

齧歯目 リス科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←LP]

中国地方のニホンリス *Sciurus lis* Temminck, 1844

日本固有種。頭胴長160~220mm。従来「中国地方以西(四国を除く)のニホンリス」の一部に含まれていたもののうち、中国地方における本種の見例はきわめて乏しい。現在、中国山地を中心に分布調査が進行中であり、その結果報告が待たれる。なお、対象となる地域をより明確にするため、中国地方と九州地方のそれぞれをLPとした。

【参考文献】 5)、46)

執筆者：押田龍夫 (帯広畜産大学)

齧歯目 リス科

LP (絶滅のおそれのある地域個体群) [←LP]

九州地方のニホンリス *Sciurus lis* Temminck, 1844

日本固有種。頭胴長 160～220 mm。従来「中国地方以西（四国を除く）のニホンリス」の一部に含まれていたもののうち、九州地方においては、近年本種の見撃例はまったく報告されていない。佐賀県からの捕獲例が報告されているが、その信憑性については定かではない。本種は、元来九州地方には分布していなかったという見方もある。現在九州地方において生息確認調査が進行中であり、その結果報告が待たれる。なお、対象となる地域をより明確にするため、中国地方と九州地方のそれぞれを LP とした。

【参考文献】 5)、46)

執筆者：押田龍夫（帯広畜産大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←EN]

ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi ikonnikovi* Ognev, 1912

近年の調査で、北海道にはほぼ全域に分布するという状況が判明した。以前は記録が少なかったが、近年の調査で飛躍的に生息情報が増え、その生息確認地点数も 128 となった。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 42)、49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←EN]

ヒメホリカワコウモリ(キタクビコウモリ) *Eptesicus nilssonii parvus* Kishida, 1932

繁殖地としては、北海道の美幌町と京極町で見つかっているのみであるが、生息地の情報は近年急激に増加し（47 地点）、北海道のほぼ全域、及び一部属島に及んでいる。多くの街中の街灯などに集まっていることが知られるようになり、個体数は非常に多いと思われる。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 25)、49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←VU]

ウスリドーブントンコウモリ *Myotis daubentonii ussuriensis* Ognev, 1927

本来の昼間の隠れ家は樹洞であるが、トンネルや家屋でも生息が確認されている。北海道のほぼ全域から確認されており、生息確認地点が 61 と、近年、生息情報が急速に増えた。分布域は広く、減少が予想される状況ではないと評価された。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←VU]

カグヤコウモリ *Myotis frater kaguyae* Imaizumi, 1956

特に北海道では生息情報が 80 と急速に増えたが、本州では 12 県 48 確認地点とそれほど多くはない。しかし、本州でも意外な場所から生息が確認されることがあり、調査が進めば今後も生息情報は増える可能性が高い。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←VU]

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

ほぼ全国の 29 道府県から 139 地点の生息情報が得られた。かつては 15 道府県からのみ知られ、出現範囲が 10,000km² 未満と考えられていたが、調査が進むにしたがって、あちらこちらで生息が確認されるようになり、今後もその確認地が増加することが予想される。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 47)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←VU]

ニホンウサギコウモリ *Plecotus auritus sacrimontis* (Allen, 1908)

かつては生息確認記録数は多くなく、出現範囲も 10,000km² 未満と考えられていたが、近年の調査により、生息確認地点が急激に増加して 37 となり、九州を除き、全国から知られるようになった。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

翼手目 ヒナコウモリ科

ランク外 [←VU]

ニホンコテングコウモリ *Murina ussuriensis silvatica* Yoshiyuki, 1983

かつて全国からの記録はあったが、確認地点数は多くなく、その出現範囲も 10,000km² 未満と考えられていた。しかし、近年の調査により 33 都道府県から 282 地点の生息確認情報が集まり、その分布域も広いということが判明した。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外（レッドリストから削除）とした。

【参考文献】 49)

執筆者：前田喜四雄（奈良教育大学）

食虫目 トガリネズミ科

ランク外 [←NT]

サドトガリネズミ *Sorex shinto sadonis* Yoshiyuki & Imaizumi, 1986

日本固有亜種。佐渡産の大型亜種で頭胴長 58.5~77.5mm。佐渡島 (855km²) の山麓から山地森林域 (約 660km²) が主要な生息域である。生息環境は比較的安定しており強力な競争種はいない。

以上から、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外 (レッドリストから削除) とした。

【参考文献】 22)

執筆者：阿部 永 (元北海道大学農学部)

霊長目 オナガザル科

ランク外 [←NT]

ヤクシマザル *Macaca fuscata yakui* Kuroda, 1940

日本固有種ニホンザルの屋久島 (505km²) 固有亜種。分布域はもともと狭いが、1991・92年に海岸部で行われた調査において、12.7km²の範囲に 131 群、2,000~3,850 頭の生息が推定されるなど、個体群サイズは大きいと考えられる。主要な生息環境である低地の常緑広葉樹林の伐採と針葉樹植林、農作物食害防止のための年間約 500 頭を超える捕獲が生息に影響を及ぼすおもな要因と考えられているが、全島に分布し、個体数の減少傾向は知られていないことから、絶滅に瀕しているとは評価されず、ランク外 (レッドリストから削除) とした。

【参考文献】 48)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

霊長目 オナガザル科

ランク外 [←LP]

下北半島のホンドザル *Macaca fuscata fuscata* (Gray, 1870)

群れの分布域は 5km メッシュ数で 1978 年に半島北西部 6、南西部 4 であったものが、1997 年には 25 (約 600km²) と拡大している。個体数も、1978 年の 4~5 群、約 290 頭から、2000 年の 20 群、約 800 頭、2006 年には 1,600 頭を越すなど増加傾向にあり、絶滅に瀕しているかその危険が増大しているとは考えにくいことからランク外 (レッドリストから削除) とした。半島頸部には野生化タイワンザルの群れが見られ、交雑の影響が懸念されたが、2004 年に全頭が除去されている。「下北半島のニホンザル」として国の天然記念物に指定されている。

【参考文献】 33)、44)

執筆者：石井信夫 (東京女子大学)

付属説明資料 哺乳類 参考文献

- 1) Abe, H., 1967. Classification and biology of Japanese Insectivora (Mammalia). I. Studies on variation and classification. J. Fac. Agr. Hokkaido Univ., 55: 191-265.
- 2) 阿部永, 2001. モグラ類における遺存個体群とその維持機構. 哺乳類科学, 41: 35-52.
- 3) 阿部永, 2003. カワネズミの捕獲、生息環境および活動. 哺乳類科学, 43: 51-65.
- 4) 阿部永・石井信夫, 1987. 対馬の哺乳類. 長崎県編, 対馬の自然, pp. 79-109.
- 5) 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明, 2005. 日本の哺乳類 (改訂版). 東海大学出版会, 206pp.
- 6) Abe, H., T. Kobayashi, K. Maeda and T. Miyao, 1970. Faunal survey of the Mt. Ishizuchi Area, JIBP main area-II. Results of the small mammal survey on the Mt. Ishizuchi Area. Ann. Rep. JIBP/CT-S. Fisc. Year 1969., pp. 7-14.
- 7) Endo, H. and K. Tsuchiya, 2006. A new species of Ryukyu spiny rat, *Tokudaia* (Muridae: Rodentia), from Tokunoshima Island, Kagoshima Prefecture, Japan. Mammal Study, 31: 42-57.
- 8) 船越公威, 1990. トカラ列島のコウモリ相. 自然愛護, 16: 3-6.
- 9) 船越公威, 1998. 鹿児島県口永良部島、屋久島および種子島の翼手類と食虫類. 哺乳類科学, 38: 293-298.
- 10) 船越公威, 2001. 高知県蒲葵島からのオヒキコウモリ *Tadarida insignis* 生息地の新記録. 哺乳類科学, 41: 87-92.
- 11) 船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治, 1999. 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所、個体数構成および活動について. 哺乳類科学, 39: 23-33.
- 12) 北海道環境科学研究センター, 2000. ヒグマ・エゾシカ生息実態調査報告書IV, 118pp.
- 13) 石井信夫・服部正策・阿部慎太郎・長岡浩子, 1996. 奄美諸島における野生ネズミ類2種の生息状況. 日本哺乳類学会1996年度大会講演要旨集, pp. 73
- 14) 石井信夫・長岡浩子・徳田浩之・安承源, 1997. 奄美大島におけるマングースの分布拡大状況. 日本哺乳類学会1997年度大会講演要旨集, pp. 162
- 15) 石川慎也, 2004. 北海道襟裳岬におけるラッコ (*Enhydra lutris*) の生息について. えりも研究, 1: 15-19.
- 16) 伊沢紘生, 2004. 平成15年度ニホンザル生息状況調査報告書. 宮城のサル調査会, 96pp.
- 17) 環境省・林野庁, 2005. イリオモテヤマネコ保護増殖事業実施報告書 (平成15・16年度), 96pp.
- 18) 粕谷俊雄・宮崎信之, 1996. ジュゴン. 川道武男編. レッドデータ日本の哺乳類, pp.186-187. 文一総合出版, 東京.
- 19) Kawai, K., M. Nikaido, M. Harada, S. Matsumura, L-K. Lin, Y. Wu, M. Hasegawa and N. Okada, 2003. The status of the Japanese and East Asian bats of the genus *Myotis* (Vespertilionidae) based on mitochondrial sequences. Molecular Phylogenetics and Evolution, 28: 297-307.
- 20) 川道美枝子, 2000. シマリス. 川道武男・近藤宣昭 (編), 冬眠する哺乳類, pp.143-161. 東京大学出版会.
- 21) 小林万里・磯野岳臣・服部薫, 2004. 北海道の海生哺乳類管理. 北の海の動物センター, 札幌. 201pp.
- 22) 子安和弘・成田裕一・原田正史・織田銑一・花村肇・山村英樹, 1995. サドトガリネズミ *Sorex sadonis* の繁殖習性. 名古屋大学環境医学研究所年報, 46: 192-193.
- 23) 前田喜四雄, 1973. 日本の哺乳類 (IX) 翼手目ヤマコウモリ属. 哺乳類科学, 27: 1-28.
- 24) 前田喜四雄, 1996. 日本産翼手目 (コウモリ類) の分類レビューと解説. 哺乳類科学, 36: 1-23.
- 25) 前田喜四雄, 1997. 日本産翼手目 (コウモリ類) の和名再検討. 哺乳類科学, 36: 237-256.
- 26) 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌—翼手類の自然史. 東京大学出版会, 203pp.
- 27) Marsh, H., 2002. Dugong. In: W.F. Perrin, B. Wursig and J.G.M. Thewissen (eds), Encyclopedia of Marine Mammals. Academic Press, San Diego. pp. 344-347.
- 28) 本川雅治, 1998. 日本産ジネズミ亜科の自然史. 阿部永・横畑泰志編. 食虫類の自然史, pp. 275-349.
- 29) Murakami, O. and N. Ohtaisi, 2000. Current distribution of the endemic sable and introduced Japanese marten in Hokkaido. Mammal Study, 25: 149-152.
- 30) 新潟県, 2001. レッドデータブックにいがた. 新潟県, 467pp.

- 31) 小原良孝, 1991. 日本産食肉類イタチ科の起源と系統進化—核学的知見の示すもの—. 哺乳類科学, 30 : 197-220.
- 32) 小原良孝, 2000. ニホンイイズナ. 青森県生活環境部自然保護課 (編), 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブック—. pp. 118.
- 33) 大井徹・増井憲一, 2002. ニホンザルの自然誌. 東海大学出版会, 367pp.
- 34) 大分県教育委員会・熊本県教育委員会・宮崎県教育委員会, 2004. 平成 14・15 年度九州山地カモシカ特別調査報告書. 156pp.
- 35) Rice, D.W., 1998. Marine Mammals of the World, Systematics and Distribution. Special Publication No. 4. The Society for Marine Mammalogy. 231pp.
- 36) Sato, M. and K. Maeda, 2003. First record of *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758 (Vespertilionidae, Chiroptera) from Japan. Bulletin of the Asian Bat Research Institute, 3: 10-14.
- 37) Shirakihara, M., Yoshida, H., Yokochi, H., Hosokawa, T., Higashi, N. and T. Kasuya, 2007. Current status and conservation needs of dugongs in southern Japan. Marine Mammal Science, 23: 694-706.
- 38) 自然環境研究センター, 1994. 平成 5 年度イリオモテヤマネコ生息特別調査報告書. 101pp.
- 39) 自然環境研究センター, 2005. 平成 16 年度ツシマヤマネコ生息状況等調査業務報告書. 100pp.
- 40) 自然環境研究センター, 2005. 平成 16 年度ジュゴンと藻場の広域的調査報告書. 環境省, 東京. 229pp.
- 41) 寺山美穂子, 2001. オヒキコウモリ観察記, 修道に生息するオヒキコウモリの集団に関して. 修道中・高等学校研究紀要, 17: 1-33
- 42) Tsytulina, K., 2001. *Myotis ikonnikovi* (Chiroptera, Vespertilionidae) and its relationships with similar species. Acta Chiroptologica, 3: 11-19
- 43) 宇仁義和, 2003. 沖縄県のジュゴン *Dugong dugon* 捕獲統計. あじまあ (名護博物館紀要), 11: 1-14.
- 44) 渡辺邦夫, 2000. 本州のニホンザル, 現状と保護管理の問題点. ニホンザル保護管理のためのワーキンググループ. 113pp.
- 45) 山田文雄・橋本琢磨・阿部慎太郎・永井弓子・小高信彦・七里浩志, 2007. トゲネズミ属 3 種の捕獲調査. 日本哺乳類学会 2007 年度大会プログラム・講演要旨集, pp.81.
- 46) 矢竹一穂・田村典子, 2001. ニホンリスの保全ガイドラインつくりに向けてⅢ, ニホンリスの保全に関わる生態. 哺乳類科学, 41: 149-157.
- 47) Yoon, M., H. Andoo, and K. Uchida, 1990. Taxonomic validity of scientific names in Japanese *Vespertilio* species by ontogenetic evidence of the penile pseudobaculum. J. Mamm. Soc. Japan, 14: 119-128.
- 48) Yoshihiro, S., T. Furuichi, M. Manda, N. Ohkubo, M. Kinoshita, N. Agetsuma, S. Azuma, H. Matsubara, H. Sugiura, D. Hill, E. Kido, R. Kubo, K. Matsushima, K. Nakajima, T. Maruhashi, T. Oi, D. Sprague, T. Tanaka, T. Tsukahara and Y. Takahata, 1998. The distribution of wild Yakushima macaque (*Macaca fuscata yakui*) troops around the coast of Yakushima Island. Primate Research 14: 179-187.
- 49) Yoshiyuki, M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. National Science Museum, 242pp.
- 50) Yoshiyuki, M., S. Hattori and K. Tsuchiya, 1989. Taxonomic analysis of two rare bats from the Amami Islands (Chiroptera, Molossidae and Rhinolophidae). Memories of the National Science Museum, 22: 215-225.

和名索引

アマミトゲネズミ	EN	4	チチブコウモリ (本州のチチブコウモリ)	LP	8
イリオモテコキクガシラコウモリ	EN	3	チョウセンイタチ	NT	6
イリオモテヤマネコ	CR	2	ツシマテン	NT	6
ウスリドーベントンコウモリ	ランク外	10	トクノシマトゲネズミ	EN	4
ウスリホオヒゲコウモリ	EN	3	ニホンイイズナ (本州のニホンイイズナ)	LP	9
エゾクロテン	NT	6	ニホンウサギコウモリ	ランク外	11
エゾシマリス	DD	7	ニホンコテングコウモリ	ランク外	11
エゾヒグマ (天塩・増毛地方のエゾヒグマ)	LP	9	ニホンリス (九州地方のニホンリス)	LP	10
エチゴモグラ	EN	2	ニホンリス (中国地方のニホンリス)	LP	9
オヒキコウモリ	EN	3	ヒナコウモリ	ランク外	11
オリイコキクガシラコウモリ	EN	3	ヒメヒナコウモリ	DD	7
カグヤコウモリ	ランク外	11	ヒメホオヒゲコウモリ	ランク外	10
カモシカ (九州地方のカモシカ)	LP	9	ヒメホリカワコウモリ	ランク外	10
カワネズミ (九州地方のカワネズミ)	LP	7	フジホオヒゲコウモリ	NT	5
コジネズミ	VU	4	ホンドザル (下北半島のホンドザル)	ランク外	12
コヤマコウモリ	VU	5	ホンドザル (金華山のホンドザル)	LP	8
サドトガリネズミ	ランク外	12	ホンドザル (北奥羽・北山系のホンドザル)	LP	8
サドノウサギ	NT	6	ホンドノレンコウモリ	VU	5
シコクトガリネズミ	DD	7	ヤクシマザル	ランク外	12
シナノホオヒゲコウモリ	VU	4	ヤマコウモリ	NT	5
ジュゴン	CR	2	ラッコ	CR	2
チチブコウモリ (四国のチチブコウモリ)	LP	8			

改訂レッドリスト 付属説明資料

哺乳類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)